

附章1 中国地方における縄文時代の墓制

－彦崎貝塚出土例を墓制論上に位置づけるために－

山田 康弘（島根大学法文学部 准教授）

はじめに

中国地方における縄文時代の墓制を総括的に議論した研究は、これまでのところほとんど存在しなかったといってよい。このような状況の中、筆者は中国地方における縄文時代の墓地・墓域について、山間部と海岸部に留意しながら分析を行なった事がある（山田2004c）。これは当時筆者が把握できた中国地方の墓地・墓域のあり方をまとめたものである。しかし、2003年から翌年にかけて行なわれた彦崎貝塚の発掘調査により、新たな資料が追加された。さらにこの調査の詳細な報告書（田嶋編2006）が刊行されるにおよび、従来の知見についても再検討を行ない、あわせて中国地方の墓制について再論する必要が出てきた。そこで、本稿では彦崎貝塚における墓の状況を再検討しつつ、中国地方の墓制について言及することにしたい。

1. 彦崎貝塚における墓地のあり方

人骨の出土状況

彦崎貝塚における人骨の埋葬状態は、過去に酒詰仲男や池葉須藤樹によって記述が行なわれている（酒詰1951、池葉須1971）。また、田嶋正憲はこれらの人骨の帰属時期について再検討を加えている（田嶋編2006）。ここではこれらの報告の記述を参考にしながら各人骨の出土状況を検討していくことにしよう。

東京大学人類学教室調査地点出土人骨

1・2・3号合葬例

池葉須によれば、地表より深さ80cmの所にあり、砂層に直径30cm、深さ23cmの円形の土壙を掘り、その中に頭蓋3個を巴状に配置してあったとされる。酒詰の記述では四肢骨を三角形に並べ、その上に頭蓋を3個鼎立させていたとされる。筆者も国立科学博物館において頭蓋および四肢骨を実見したが、大腿骨等は形状を保っており、直径30cm程度の土壙に入っていたとは考えにくい。本来はもっと大きな土壙が存在したと解釈すべきであろう。これらの頭蓋や四肢骨は被熱し、一部赤色化しているが、いわゆる焼人骨ではない。酒詰の記述によれば、炉址かと思い調査したところ人骨が出土したとされているので、おそらくは埋葬後になんらかの原因で土壙上部で強く火が焚かれ、それにより被熱したものであろう。1号は熟年期男性、2号は熟年から老年期の男性、3号は熟年期男性と推定される。また、これらのうち1号人骨と2号人骨には前頭縫合線が確認できること、また1・2・3号人骨にはラムダ縫合線小骨が確認できることなどから、これらの人骨はなんらかの血縁関係にあった可能性が想定できる。池葉須は前期の人骨としているが、層位関係を検討した田嶋によれば中期のものである可能性が高いとされている。

4号人骨

池葉須によれば、長径90cm、短径60cmの楕円形の土壙に埋葬されていたとされる。頭位方向はS24°Eで、埋葬姿勢は不明である。青年期から壮年期の女性だと思われる。この人骨の腸骨には浅いなが

らも前耳状面溝が確認でき、経産婦であったと推定される。池葉須は本人骨の帰属時期を前期としているが、田嶋によれば中期の所産である可能性が高いとされる。

5号人骨

長径75cm、短径50cmの土壙に右下側臥屈葬の形で埋葬されていた。頭位方向はS38°Eである。歯の残存状況は良好だが、抜歯は確認できない。腸骨稜のラインがまだ痕跡をとどめているものの、下顎のM3は萌出していることから、壮年期の男性と思われる。周辺の土は焼けていたとされる。

6号人骨

唯一貝層中より発見された人骨であり、埋葬施設等は確認されていない。左下側臥屈葬例であり、頭位方向はS34°Eである。熟年期の男性と思われる。池葉須によれば後期の人骨とされているが、下顎の第一および第二切歯が脱落、対応する歯槽が閉鎖していることから4I型抜歯を施された晩期人骨の可能性も存在する。

7号人骨

長径100cm、短径65cmの土壙に左下側臥屈葬の形で埋葬されていた。頭位方向はS20°Eで、熟年期の男性と思われる。上顎左右第2小白歯が欠落、歯槽閉鎖しており、これが抜歯であった可能性も存在する。池葉須の報告では時期についての記載が存在せず、帰属時期は不明であるが、これが抜歯であるならば、本人骨の帰属時期はおそらく後期以降ということになるだろう。

8・9・10号人骨

池葉須の報告では散乱骨と認識され、スコップで掘り上げられたとされている。しかし、長径100cm、短径65cmの土壙内に一括して埋葬されていたようであることから、おそらくは1～3号人骨と同様に3体合葬複葬例であろう。頭蓋から見るかぎり、8号人骨は壮年期の女性、9号人骨も壮年期の女性であり、これは顎関節症を患っていた可能性がある。また、この2体には右ラムダ縫合線小骨が存在する。帰属は不明だが、非常に深い前耳状面溝を有する腸骨が確認できることから、経産婦の遺体が含まれていたと考えられる。10号人骨は、小児期段階の子供である。

11号人骨

5歳程度の幼児期段階の人骨である。直径60cm、短径50cmの土壙中に埋葬されていたが、保存状態が悪く、土ごと取り上げられたとされている。

12号人骨

8～10号合葬複葬例の下部、一部土壙が切合った形で検出されている。土壙の規模は長径100cm、短径80cmで、頭位方向はS28°Eである。埋葬姿勢は右下横臥屈葬らしい。熟年期の男性だと思われる。ただし、大腿骨のピラステル構造がほとんど発達していないこと、顔面頭蓋鼻根部が平坦であることなど、本人骨の形質には、いささか疑問点も存在する。また、右側大腿骨の後面側には骨膜炎の痕跡が観察できる。8～10号人骨埋葬例の下部より発見されたということは、本例が時期的に先行する可能性があるということである。しかし、下顎の右側第一・第二切歯および左側第二切歯が脱落、歯槽閉鎖しており、これを抜歯とみるならば、晩期以降の事例であると考えることもできる。その場合、8～10号人骨が何時の時点で複葬されたのかという点について再考を要することになるだろう。

13号人骨

池葉須による報告書の記載からは、具体的な埋葬姿勢を知ることができない。土壙規模も不明である。ただし、岡山市に残されている写真からは仰臥屈葬であったと思われる。右肘関節の角度は不明

だが、左は強く屈している。腰および両下肢も同様である。I?a1に分類される（山田2001b）。頭位方向はS70°Wである。熟年期の男性人骨であり、抜歯は確認できない。

14号人骨

壮年期の女性人骨である。上下の智歯は萌出しているものの、腸骨稜や脛骨近位端の骨端線が完全に癒合せず残存していることから、年齢的には壮年前期の事例であろう。この女性人骨の寛骨腔内から胎児骨が出土している。胎児骨の四肢骨骨化長は右大腿骨で53mm、右脛骨で48mm、右上腕骨で46mmであり、森田らの研究と照合した場合、胎児の週齢は第31週前後であったと考えることができる（森田他1973）。腸骨には浅い前耳状面溝が確認できることから、出産前に亡くなった若い妊産婦の埋葬であろう。池葉須の記述では男性骨とされているが、間壁葭子の記述によれば、調査時点での妊産婦の埋葬例と判断されていたとのことであるから（間壁1987）、双方の記述には矛盾が存在する。土壌規模は不明であるが、頭頂部から骨盤までの測定値が85cmであるから、それよりは大きな土壌に埋葬されていたのであろう。埋葬姿勢は右下側臥屈葬例である。写真から判断すると、右肘角度は不明、左はほぼ直角、腰もほぼ直角であるが両膝関節は強く屈している。II?b2である。頭位方向は、脊柱の方位N0°Sとの記述があるものの、図では頭が南側に描かれていることなどから判断して、真南であったと思われる。なお、本人骨にともなってアカガイ製の貝輪が1点確認されている。池葉須によれば前期の事例とされている。抜歯は確認できない。

15号人骨

男性骨とされているが、筆者は本人骨を実見していない。右下側臥屈葬で埋葬された前期の事例だとされる。頭位方向はN0°Sとされるが、池葉須の図によれば、頭位はほぼ真南に向いている。

16号人骨

右下横臥屈葬で埋葬されていた、熟年期の女性人骨である。頭位方向はN90°Eである。下顎の左右第一切歯が脱落、歯槽閉鎖している。池葉須報告では前期とされているが、先の歯牙脱落が抜歯だとするならば、帰属時期を再考する必要が出てくるだろう。また、仙骨直上の椎骨2点が変形癒着しており、また腸骨と仙骨の関節面を変形していることから、圧迫骨折をしていた可能性もある。また左右の尺骨近位端部には変形関節炎が確認できた。

17号人骨

池葉須の報告では記載がないが、筆者が国立科学博物館で実見した資料中には存在した。壮年期の事例である。腸骨の大座骨切痕が狭いことから、男性骨と思われるが、後頭隆起があまり発達しておらず、四肢骨も華奢である。抜歯は存在しない。

18・19号人骨

2体合葬单葬例である。18号人骨は壮年期男性、19号人骨は壮年期女性である。両人骨とも抜歯は確認できない。19号人骨には浅いが前耳状面溝が観察できるので経産婦であった可能性がある。土壌の規模は長径95cm、短径70cmである。頭位方向は2体とも同じで、ほぼ真北である。埋葬姿勢は2体とも仰臥屈葬で、岡山市教育委員会が保存している写真からみる限り、右側に埋葬された18号人骨ではIAa1、左側の19号人骨ではI?a?である。ただし19号の左関節の角度が鋭角であること、右膝関節の角度が同じく鋭角であることなどから、19号の埋葬姿勢も18号と同じIAa1であった可能性が高い。時期についての記載はない。

20号人骨

熟年期の男性人骨である。池葉須報告では右下屈葬例とされ、頭位方向はS25°Wである。岡山市に保管されている写真からは、左右の上肢下肢は強く屈しており、また腰も強く屈している。ただ側臥かどうかは判断できない。池葉須の報告と写真を総合すると埋葬姿勢はⅡ Aa1となるだろう。前期の事例とされている。

21号人骨

仰臥屈葬例で、頭位方向はほぼ真南らしい。国立科学博物館には該当資料がなかった。前期の事例とされている。

灘崎町調査地点出土人骨

1号人骨

平成16年度より灘崎町によって彦崎貝塚の発掘調査が行なわれたが、その時に出土した人骨である。頭蓋の大部分および四肢骨の一部が出土している。人骨は壮年後半から熟年前半の男性である。本例には明確な埋葬施設は存在せず、調査者の田嶋は散乱骨とともに、2次埋葬例であるともしている。頭蓋のみが埋葬されていた事例としては、愛知県稻荷山貝塚出土例や、千葉県西広貝塚出土例などが存在するが（山田2001f）、明確な埋葬施設を伴わない以上、本例におけるこの種の判断は難しい。この人骨にともなって、エイの椎骨製の玉が1点出土している。帰属時期は、中期船元IV式期と考えられている。

2号人骨

長径100cm、短径78cmの楕円形を呈する土壙中から出土している4歳程度の幼児期の人骨である。調査者の田嶋は人骨が土壙中央部より集中的に出土したことから複葬例である可能性を指摘しているが、概して子供の複葬例は稀有である。また、人骨の鑑定結果をみると少量ではあるものの四肢骨がそれなりに確認されていることから、単葬例であった可能性も否定はできないであろう。埋葬姿勢、頭位方向などは不明である。帰属時期は中期船元I式期と考えられている。

3・4号人骨

3号人骨と4号人骨は同一の土壙内に埋葬されたと思われる合葬例である。土壙の規模は長径81cm、短径73cmでありほぼ円形のプランを呈する。

3号人骨は右寛骨と右脛骨のみであり、基本的に複葬例と考えられる。報告によれば成人男性のものとされる。

4号人骨は3号人骨の下層より出土した単葬例である。埋葬姿勢は仰臥屈葬であるが、東京大学人類学教室調査区出土人骨とは異なり、上肢を伸ばし腹部に乗せるICa1である。頭位方向はN5°Wである。壮年後半から熟年前半の女性人骨であり、腸骨には前耳状面溝が確認され、経産婦であったと思われる。本例の帰属時期は中期初頭船元I式期のものと考えられている。なお、土壙の最下層よりエイ椎骨製小玉が2点出土している。おそらくは4号人骨に伴う装身具であろう。形態的には1号人骨に伴ったものと同じものである。

彦崎貝塚出土人骨の埋葬属性

では、上述した各埋葬例をもとに、埋葬属性を検討してみよう。まず、埋葬形態であるが、単独単葬例が12例12体であり、基本的にはこれが埋葬例の大部分を占める。しかし合葬単葬例も1例2体存

在する。また、目立ったのが複葬例である。単独複葬例は、灘崎町調査2号人骨にその可能性が残るが確証はない。また、灘崎町3号人骨のように単葬例と合葬される場合も存在する。合葬複葬例は2例6体であり、本遺跡において特徴的な葬法となっている。

単葬例の埋葬姿勢について検討してみると、右下側臥屈葬例が6例と一番多く、その次が仰臥屈葬例が4例と続き、左下側臥屈葬例が3例となる。仰臥、側臥の区別をした場合、側臥例が9例と仰臥例を倍以上上回る。彦崎貝塚においては側臥屈葬が主体であったということができるだろう。また、肘・腰・膝の角度が鋭角である事例も多い。岡山市教育委員会が保管する写真で見るかぎり、例外は14号人骨であるが、これは妊産婦の埋葬例であることとも関係するのであろう。

頭位方向についても面白い傾向をみることができる。東京大学人類学教室が調査した人骨のうち、調査区の西側、1～5区にかけて出土した人骨の頭位方向はS20°EからS38°Eの範囲に集中する傾向があるのに対して、東側の6～9区より出土した人骨の頭位方向は、Sが3例、S25Wが1例と南に偏るものとS70Wと南西に向くもののほかNやN5Wなど、ややまとまりに欠ける。時期差が反映したものであろうか。しかし、人骨の出土地点（第2-2図）に注目してみると、頭位方向のあり方によってまとまりが存在するようにも見え、これらが埋葬小群を構成する一傍証となる可能性も否定できない。以下ではこれらの埋葬属性をもとに、彦崎貝塚出土人骨群を中国地方における墓制のあり方の中に位置づけてみることにしよう。

2. 中国地方における墓地のあり方

墓の認定条件

考古学的に検出された遺構をいかにして墓と認定するのかという問題については、これまでにも梅沢太久夫氏や中村大氏らによって議論されてきている（梅沢1971・中村1998、註2）。筆者自身も、墓の認定には人骨を含めた遺体の痕跡を検出することが最も重要であると述べ、その基礎的な基準を作成するために人骨出土例を中心として埋葬姿勢のあり方やそれに対応する土壙の形態や規模について、実際に検討を行なってきた（山田1999a・2001bなど）。しかし、現実問題として土坑の調査者がどのような意識のもと調査を行ない、どのような証拠をもとに墓と認定したのかによって、報告される墓の数は大きく変動するだろうし、ましてや調査の当事者が土坑の性格について積極的に記載を行なうことは多くないという現状を踏まえた場合、墓と報告される事例数は実際の数よりも相当少ないと見積もってよい。このような状況において墓と認定されている事例を単純にそのまま一つ一つ数え上げたとしても、墓制ならびにその先の研究目的である社会構造等に関して、さほど意味のある議論ができるとは筆者には思えない。これらの点を踏まえ、先の中村大氏の認定条件を一部採用し、本稿ではすでに報告された中国地方の事例のうち、遺構内から人骨が出土したもの、人骨出土例と比較して土坑の規模や形状が墓として適当であると思われるもの、土坑の上部や開口部の周囲などに整った配石をもつもの、装身具や副葬品と推定される遺物が土坑内から出土したものを墓と積極的に認定することとし、地点的に集中する土坑群中に上記の認定条件を満たす事例がある場合、これらを一括して墓地（墓域）として捉えることにしたい（註3）。また、墓制を議論するためには、ある程度まとまった事例数を必要とすることから、以下では墓地を形成していると考えることのできる遺跡例を中心によりあげていくこととする（第1図）。

代表的な墓地の事例

上記の認定条件のもと、墓地と考えることのできる事例について概観してみることにしよう。人骨がある程度の数まとまって出土するなどして、確実に墓地を形成していると判断できる遺跡としては、広島県大田貝塚（前期～中期？、第1図-18）（清野1969・潮見編1971）、同帝釈寄倉岩陰遺跡（後期、第1図-14・第7図-1）（戸沢他1976）、同帝釈猿神岩陰遺跡（晚期、第1図-15）（川越1978）、同帝釈名越岩陰遺跡（晚期？、第1図-16・第3図-4）（川越1976a）、同豊松堂面洞窟遺跡（後期、第1図-17・第2図-4）（川越1976b）、岡山県船元貝塚（中期？、第1図-22・第2図-1）（清野1969）、同津雲貝塚（後～晚期？、第1図-19・第4図-1）（清野1918）、同彦崎貝塚（前・後期、第1図-23・第2図-2）（池葉須1971）、同里木貝塚（中～後期、第1図-20・第2図-3）（倉敷考古館編1971）、同船倉貝塚（前期、第1図-21・第3図-6、第7図-4・5）（鍵谷編1999）、山口県御堂遺跡（晚期、第1図-1・第3図-5、第7図-6）（水島編1991）、同岩田遺跡（後～晚期、第1図-1・第3図-7）（潮見他1955・中越2000）などを挙げることができる。これらの遺跡は、帝釈峠遺跡群を除き、いずれも山陽地方瀬戸内側の沿岸部に所在する。これに対して帝釈峠遺跡群は、その位置から山間部にあるということができよう。また、人骨こそ出土してはいないが、土壙内から敷石が出土している広島県陽内遺跡（中期、第1図-13・第5図-2・第7図-3）（稻垣編1999）や土壙内から玉類が出土している岡山県久田原遺跡（後～晚期、第1図-26・第6図-2）（江見編2004）の事例なども山間部の墓地として考えられるだろう。

これに対して、日本海側の山陰地方沿岸部では、まとまった人骨出土例は報告されていない。わずかに島根県サルガ鼻洞窟遺跡と同小浜洞窟遺跡においてその可能性が知られるが（佐々木他1937・山本1967）、残念ながら考古学的な情報が欠落している。また、山陰地方の山間部においても、人骨出土例は今のところ報告されていない。先の認定条件と照合した場合、墓地と捉えることのできる事例としては、島根県板屋Ⅲ遺跡（晚期、第1図-8・第4図-2）（角田編1998）、同下山遺跡（後期、第1図-6・第3図-2）（深田編2002）、同宮田遺跡（後期、第1図-9）（西尾編1979）、同貝谷遺跡（後期、第1図-7・第6図-1）（神柱編2002）、同平田遺跡（後期、第1図-10）（坂本他編1997）、同ヨレ遺跡・イセ遺跡（後～晚期、第1図-5・第3図-3）（渡辺編1993）、同水田ノ上遺跡（後～晚期、第1図-4）（渡辺編1991）、同石ヶ坪遺跡（晚期、第1図-3）（渡辺編1990）、家の後Ⅱ・原田遺跡（後～晚期、第1図-11）、鳥取県上福万遺跡（早期、第1図-24・第5図-1・第7図-2）（長岡編1985）、同松ヶ坪遺跡（晚期、第1図-25・第3図-1）（森下1996）などが挙げられる。鳥取県の二遺跡は、立地や当時の推定海岸線からみて沿岸部の遺跡とも山間部の遺跡とも言い難い位置にあるが、ひとまず便宜的に上福万遺跡を沿岸部、松ヶ坪遺跡を山間部と捉えておくことにする。先に挙げた島根県内の遺跡はすべて山間部の遺跡と捉えて大過ないだろう。以上の遺跡の地域区分は多分に感覚的なものであるが、地図上に遺跡の位置を落としてみると海岸線からの距離を判断基準として、山間部の事例と沿岸部の事例を概ね区分することができる（第1図参照）。これらの事例を中心として、次節では埋葬属性にみられる傾向性について検討を行なうことにしておこう。

埋葬属性にみられる傾向性

墓から得られる考古学的情報を総称して、これを埋葬属性と呼ぶ。ここでは埋葬形態や埋葬姿勢、頭位方向などの埋葬属性について概観してみることにしたい。

埋葬形態

遺体が埋葬されている施設、一施設内に埋葬されている遺体の数、遺体処理の回数といった埋葬のあり方に関する属性を埋葬形態と言う（山田1996）。

中国地方の場合、基本的には山間部沿岸部の両地域とも土坑墓内における単独・单葬例が多い。また、山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡（第7図-1）や、帝釈猿神岩陰遺跡からは合葬・複葬例が確認されている。ただし、規模こそは小さくなるものの合葬・複葬例は彦崎貝塚からも出土しているし（第2図-2、1～3号および8～10号）、また、船倉貝塚と彦崎貝塚では複葬人骨と单葬人骨が同一の土壙内に合葬されている事例が出土しているなど（第7図-5）、個別に見た埋葬形態は両地域とも予想以上に複雑な様相を呈している。従来、アブリオリナ形で山間部の洞窟・岩陰遺跡には複葬例が多いと考えられることが多かったが、中国地方においては必ずしもあてはまらないと言うことができるだろう。

土器棺墓と捉えることのできる土器埋設遺構は、島根県暮地遺跡（後期、杉原1981）や宮田遺跡、家の後Ⅱ遺跡、松ヶ坪遺跡といった山間部に多くみることができる。その一方で、沿岸部の岩田遺跡（第3図-7、1～5号）や津雲貝塚（第4図-1、26号）においても土器棺墓が確認されている。これらの山間部および沿岸部の土器埋設遺構はそれぞれの地域ごとで系譜が異なるものであり（山田2001c）、その意味では地域的傾向性を示すものといえるだろう。ただその一方で、彦崎貝塚では土器内からイノシシが出土している事例も存在し、筆者が土器埋設遺構がすべからく土器棺墓であるとは考えていないことも強調しておきたい（山田前出）。

なお、山口県御堂遺跡からは木棺墓であることが確実な資料が検出されている（第7図-6）。しかし、現在のところ比較検討できる縄文時代の類例が中国地方ではなく、資料的に孤立している感がある。

埋葬姿勢

全国的な視野からの検討により、中国地方では膝を強く曲げた「屈葬」例（山田分類のa1・b1・c1）が卓越することが判明している（山田2001b、第8図参照）。大田貝塚出土例のように「伸展葬」例（山田分類のc1）が過半数を占める遺跡も存在するが（註4）、人骨出土例に関しては、基本的には全時期を通じて「屈葬」例が主流をなすようである。また、人骨が検出できなかった事例についても、全国的な土壙の形状や規模の傾向からみて（山田1999a、第1表参照）、埋葬姿勢は「屈葬」が主体であったと推定される。このことは、彦崎貝塚にもあてはまる。埋葬姿勢に関しては中国地方一般に見られる埋葬属性であると言えるだろう。

土壙の形状と規模

明確に土壙の形状や規模が記載されている事例は、さほど多くない。調査によって土壙の形状や規模が判明した事例では、楕円形ないし不整円形のものが多く、土壙長も1.0～1.6m程のものが多いことが判っている（山田1998）。これは、「屈葬」を主体とする埋葬姿勢が土壙の規模に反映されているためと考えることができるだろう（山田1999a）。彦崎貝塚の事例もこの範疇で捉えることができる。

一方、配石墓の中には、上福万遺跡の事例（第7図-2）のように土壙長が2mを超えるものも存在する。このような事例は、基本的に「伸展葬」例であったと考えができるだろう（山田1999a）。大局的にみた場合、埋葬姿勢のあり方からもうかがうができるように、山間部と沿岸部では土壙の形状と規模に関しては明確な差異は存在しないようである。

また、中國地方においても東日本の諸例と同様に、貯蔵穴が墓に転用された可能性について考慮しておく必要がある。例えば、船倉貝塚のように土壙埋土の中層から人骨が出土し、人骨下位に大型の礫が複数存在するような事例は貯蔵穴が墓に転用された可能性がある（第7図-4）。だが、岡山県南方前池遺跡（近藤編1995）や島根県九日田遺跡（岡崎編2000）などの事例からも明らかなように、貯蔵穴も群在化する傾向があり、土坑内部ないし上部に配石を持つものも存在することから、現実的には人骨ないし植物遺存体が発見できなかった場合、形状と規模のみから土坑の性格を一律に推定することは難しいだろう。

上部構造

船倉貝塚、里木貝塚、帝釈峠遺跡群、貝谷遺跡など、山間部と沿岸部の両地域において、墓の上部構造としてあるいは遺体に接して何らかの形で配石がなされているものが確認できる。特に下山遺跡では、墓標としての立石を持つものが確認されている。また、土壙内埋土上部から多数の大型礫が出土する場合もあるが、これらの一一部は遺体の腐敗消失にともなって土壙内に落ち込んだ上部配石とも考えることができるだろう。

上部構造とは言えないかもしれないが、土壙の上部で火を焚いた事例や、そのせいであろうか人骨自体が被熱している事例が瀬戸内側、特に岡山県域の沿岸部において散見されることは注目しておきたい。無論、彦崎貝塚においてもこのような事例は顕著である。複葬プロセスの一環として存在したのか、それともかつて清野謙次が指摘したような燔火の風習があったのであろうか（清野1946）。ただし、彦崎貝塚の場合、土層が非常に硬く焼き締まっており、場所によっては移植ゴテが通らないような場所も存在した。このことは、火が一回焚かれたというようなものではなく、比較的長期にわたって繰り返し着火されたという状況が推定できる。火を用いる葬送儀礼が繰り返し挙行されたのか、あるいは関東のハマ貝塚にみることができるような「貝処理」施設が偶然にも墓の上に設置されたのか、それとも墓と処理施設に有機的な関連があるのか、今後の検討が必要であろう。

墓地の構造・土壙相互の位置関係

墓地全体の形状については不明な部分が多い。しかし、遺跡によっては人骨の出土地点が特定箇所に集中する事例があることから、埋葬小群が存在したと推定することができる。これらの埋葬小群は、基本的には集塊状をなし、中には環状を呈すると思われる事例も存在する（山田1998・2000、第2図-3・第4図-1を参照）。下山遺跡では上部構造の形態によって埋葬小群を区分することができるとされ（角田2000）、これがなんらかの社会的な分節構造を表している可能性もある。このことは、彦崎貝塚においてもあてはまる可能性がある。

代表的な遺跡を通してみると、中國地方の縄文時代における墓地の構造は、山間部「海岸域」共に、基本的には塊状または環状配置をもつ埋葬小群が単独ないしは複数存在するというあり方を示すと考えられるだろう。なお、人骨の出土数からみて、大田貝塚や津雲貝塚（第4図-1）などのような大規模な墓地が瀬戸内側の沿岸部には存在するようと思われるが、土壙や配石遺構の分布範囲という点からみれば、板屋Ⅲ遺跡（第4図-2）や下山遺跡（第3図-2）、水田ノ上遺跡といった山間部の墓地にも沿岸部の墓地に匹敵する広がりを持つものが存在するということは指摘しておきたい。

このような墓地は、上福万遺跡（第5図-1）に見られるように早期にはすでに形成されており、事例としては晩期に到るまで存続する。しかし、その一方で通常の遺跡内における個々の墓のあり方を考えた場合、群在化し墓地を構成するパターンよりも、貝谷遺跡などで見られるように住居跡に近

接した場所に単独ないし数基の墓が造られるといったパターンの方が多いのではないかとも予想される。その場合、単独ないし数基の墓がある遺跡と群在化した墓地のある遺跡の関係がどのようなものであったのか、今後考えて行く必要がでてくるだろう。

また、上記のような墓地のあり方は、弥生時代になり渡来系弥生人の墓制である列状配置墓が出現するに到って大きく山間部と沿岸部の二つの地域、すなわち縄文的墓制の残存する地域と弥生時代になって導入された新しい墓制をもつ地域に分割されるようになる（山田2000、註5）。弥生時代の始まりを考える上で興味深い現象である。

頭位方向

各遺跡に共通するような傾向性はないが、里木貝塚や津雲貝塚では近接する人骨の頭位がほぼ同じ方位を向くという事例も確認でき、これが逆に埋葬小群の抽出を可能としている。また、同様の傾向は、先に検討した彦崎貝塚出土人骨群や上福万遺跡の配石墓群においてもみることができる。ただし、頭位方向そのものが直接的に当時の社会構造を反映しているという保証は必ずしもなく（山田2003）、頭位が何を表しているのかという点については、今後さらなる検討が必要である。

装身具・副葬品

船倉貝塚からは、頭飾（耳飾？）を着装した前期の人骨が出土している。船元貝塚（中期？）と里木貝塚（後期）に腕飾（貝輪）着装例が存在する。津雲貝塚（晩期）などでは腕飾（貝輪）や腰飾、耳飾などの着装例が確認されている。中津貝塚（晩期？）からも腕飾（貝輪）と耳飾を着装した人骨が出土している（鎌木1955）。彦崎貝塚の場合、中期の埋葬例からエイ椎骨製の装身具が出土している。現在のところ、この種の小玉を着装していた人骨は、彦崎貝塚以外では見つかっていない。概して沿岸部の晩期の事例が多いが、山間部においても晩期のヨレ遺跡や、水田ノ上遺跡、原田遺跡、久田原遺跡などで玉類が出土しており、装身具の着装ないし副葬が必ずしもこの時期の沿岸部に偏るものではなさそうである（山田2001e）。また、副葬品については土壙内から出土した石器類などにその可能性を認めることができるが、厳密には判別しがたいものが多い（山田2004a）。有機物例の消失を考慮する必要があるが、全体的には両地域ともあまり発達するとは言えないだろう（山田前出）。

身体変工

抜歯のあり方およびそれと他の埋葬属性との関係については、すでに春成秀爾氏によって親族構造のあり方にまで踏み込んだ詳細な研究がなされているので、そちらを参照されたい（春成2002）。ここでは、河瀬正利氏が述べるように山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡などから2C型の抜歯を施行された人骨が出土していることを指摘しておきたい（河瀬1988）。その場合、寄倉岩陰遺跡の合葬・複葬例の時期が本当に後期のものであるのかという点も含め、沿岸部と山間部ではこの時期同様の風習が存在したのか、それとも婚姻などによる移住者と考えるべきなのであろうかといった問題点が浮上する。いずれにせよ、両地域の交流のあり方を考える上で重要な資料となるだろう。

彦崎貝塚の場合、歯周病等による歯牙脱落の可能性が高いものの、抜歯をしている可能性も否定できない人骨が何例か存在した。今後、これらの人骨の帰属時期も含めて検討する必要があるだろう。

人類学的所見

彦崎貝塚や帝釈寄倉岩陰遺跡出土の合葬・複葬例には、前頭縫合などの頭蓋形態非計測的小変異を共有する事例がある（山田2001d）。通婚圏の検討が必要であり、決して過大評価することはできないが、考古学的なコンテクストと考え合わせた場合、何らかの血縁集団のあり方が墓制に反映されて

いる可能性については考慮してもよいだろう。

年齢段階による地点別埋葬については、これまで帝釈寄倉岩陰遺跡の合葬・複葬例（第7図-1）が大人と子供を区分している事例として挙げられてきたが（戸沢他1976・河瀬1988）、筆者が出土人骨を検討したところ、東京大学総合研究博物館に保管されている資料からは、そのような傾向は確認できなかった（山田2002b）。その一方で、津雲貝塚や豊松堂面洞窟では、子供の人骨の出土地点に偏りがあり（第4図-1・第2図-4）、遺跡によっては、年齢別に埋葬地点が定められていた可能性が存在する（山田1996）。

性別による埋葬地点の区分については、渡辺誠氏が津雲貝塚において、瀬川拓郎氏が船元貝塚においてその存在を指摘している（渡辺1973、瀬川1980）。しかし、渡辺氏の描いた性別区分による埋葬小群の境界線は非常に大きなものであり、これをそのまま埋葬小群の単位としてみると躊躇を覚える。瀬川氏が描いた性別区分の境界線は、京都大学に保管されている人骨からは確認できなかった（山田2002b）。しかし、この地点から出土した人骨が女性に偏ることから（山田前出）、女性を中心とする埋葬小群が存在したことを裏付けるものとも考えることができ、逆にこの時期に性別による埋葬地点の区分が存在した可能性を示すものと考えることができるだろう。

この他、人骨そのものに含まれる炭素窒素同位体を分析することによって、山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡と「海岸域」の津雲貝塚では当時の人々の摂取した食物が異なるというシミュレーション結果が公表されている（南川1995）。まだまだ分析事例数も少ないとから速断することは避けたいが、地域性を考える上で傾聴に値する指摘であろう。

3. 中国地方の縄文墓制の中で彦崎貝塚出土例をどう捉えるか？

以上、中国地方の墓地を概観してきた。今度はこれらと先に述べた彦崎貝塚の墓地のあり方を比較してみることにしよう。

まず、大局的に見て、彦崎貝塚の墓地には血縁関係者を中心とした埋葬原理が存在したとみてよいだろう。これは、合葬複葬例のあり方や合葬单葬例が存在することからも傍証できるだろう。また、人骨の出土位置からみて、埋葬小群が存在する可能性も高い。その場合、埋葬小群中に含まれる遺体数は、多くても10体前後である。埋葬姿勢は屈葬が多く、单葬複葬とともに混在する状況にある。このようなあり方は、他の中国地方における墓地のあり方と比較して、必ずしもこれを極端に逸脱するものではない。その意味では、彦崎貝塚における墓地は、中国地方における標準的な資料であると言えることもできるだろう。しかし、その一方で彦崎貝塚では非常に保存状態の良い人骨が出土したからこそ、ここまで言及が可能であったということもできる。いずれにせよ彦崎貝塚の墓地および出土人骨群が縄文時代の墓制を語るうえで第一級の資料であることは間違いない。

筆者はこれまでにも中国地方の集落のあり方および居住形態や生業形態、墓地のあり方等について検討を行ない、中国地方の縄文集落は居住人口が10人を大きく超えるようなことはなく、住居も二～三棟程度の小規模なものであること、必ずしも資料的・時間的に重層化していくような「定住性」の高いものであるとは言い切れないこと、当地において東日本のような祭祀装置が発達しなかった理由には上記のような背景があったこと、墓制もこれと連動している可能性があることなどを繰り返し主張してきた（山田1999b・2000・2002a・2004b）。彦崎貝塚における生業形態および居住形態については今後の検討課題であるが、通年的な集落であったのか、それともある程度季節によって移動を行

なうような居住形態を有していたのか十分な吟味を行なう必要があるだろう。

以前にも述べたように筆者は、墓制とは個々の集団の主体性を認めながらも、「環境適応行動戦略」の一環として捉えられるべきものであると考えている（山田2003）。中国地方の縄文墓制に関しては、定着性の高い集団と遊動性の高い集団とでは墓のあり方が異なることはないのか、墓のあり方と集落のあり方はどのように対応しているのか、一つの集落構成員全員が一つの墓地に埋葬されるのか、異なる場所に埋葬されることはないのか、一つの墓地に複数の集落の構成員が埋葬されることはないのか、そもそも一つの集落構成員全員が埋葬されたのか、などといった多岐にわたる一方で非常に根本的な問題が未解決のままこれまで残されてきたことになる。彦崎貝塚の発掘調査およびその後の分析によってこれらの疑問点を解決する手がかりが得られることを切に願う。

<註>

- 1) 中国地方の縄文墓制については、すでにこれまでにも何回か述べたことがある（山田1998、2000、2001c、2001dなど）。各論の詳細についてはそれらの文献を参照されたい。
- 2) 梅沢太久夫氏の挙げた認定条件は以下のとおりである（梅沢1971）。
 - 1 土葬される姿勢は後期を中心として関東地方に伸展葬が多く認められると言われているが、縄文時代全般を通してみると普遍的なものは「屈葬」である。
 - 2 土壙のもつ形態は平面形が円あるいは橢円形を呈し、底の状態は平底あるいは皿状底である。
 - 3 土壙の規模は口径の長径が100～150センチ位が一般的で、その中には稻荷洞穴のように30センチというのもある。
 - 4 土壙内や上部より「火にまつわる」炭化物・焼土・灰等が認められる傾向がある。
 - 5 埋葬人骨の近くに焚火痕が認められる場合もある。
 - 6 中期以降になると土器・土製品が副葬品として納められている例が出現する。
 - 7 後期以降になると貝輪・玉類等装飾品が着装の結果として、あるいは副葬品として認められる場合がある。
 - 8 後期には埋葬人骨が集中して発見され、墓地の存在が認められる場合もある。
 - 9 墓地の中で集落の形態に似せて作られた様子が認められるものもある。
 - 10 中期末以降墓地と集落の位置関係については、明確にしえないが、ある程度のへだたりは持っていたものと考えられる。
- また、中村大氏の挙げた認定条件は以下のとおりである（中村1998）。
 - 1 人骨が検出される。
 - 2 副葬品が発見される。つまり、貝輪・玉類・耳飾りなどの装身具や石棒・石剣などの第2の道具が、底面や覆土下部から出土する。
 - 3 赤色顔料が土壙の底面や上面に散布されている。
 - 4 土壙の上面に、配石や集積など墓標と考えられる施設を有する。あるいは土壙の底や壁に礫を並べる。
 - 5 土壙の上面に礫を立てるか置く土壙。
 - 6 上面に黄褐色土層を有する土壙。
 - 7 底面に溝やピットを有する土壙。

- 8 底面から覆土下部にかけて数個の礫を置く土壙。
- 9 底面から覆土下部にかけて精製土器が出土する土壙。
- 3) ただし、この認定方法でも貯蔵穴と土壙の峻別は困難な場合がある。後述するが、貯蔵穴が墓坑に転用された場合、人骨の遺存が確認できなければ、墓としての認定は、単独では基本的に不可能であろう。化学的な判定方法の確立が希求される所以である。
- 4) ただし、大田貝塚出土とされる人骨が全て縄文時代のものであるのか、今後詳細な検討が必要であると筆者は考える。
- 5) 山口県土井ヶ浜遺跡や島根県堀部第一遺跡、鳥取県長瀬高浜遺跡などはその典型例である。詳しくは山田2000を参照されたい。

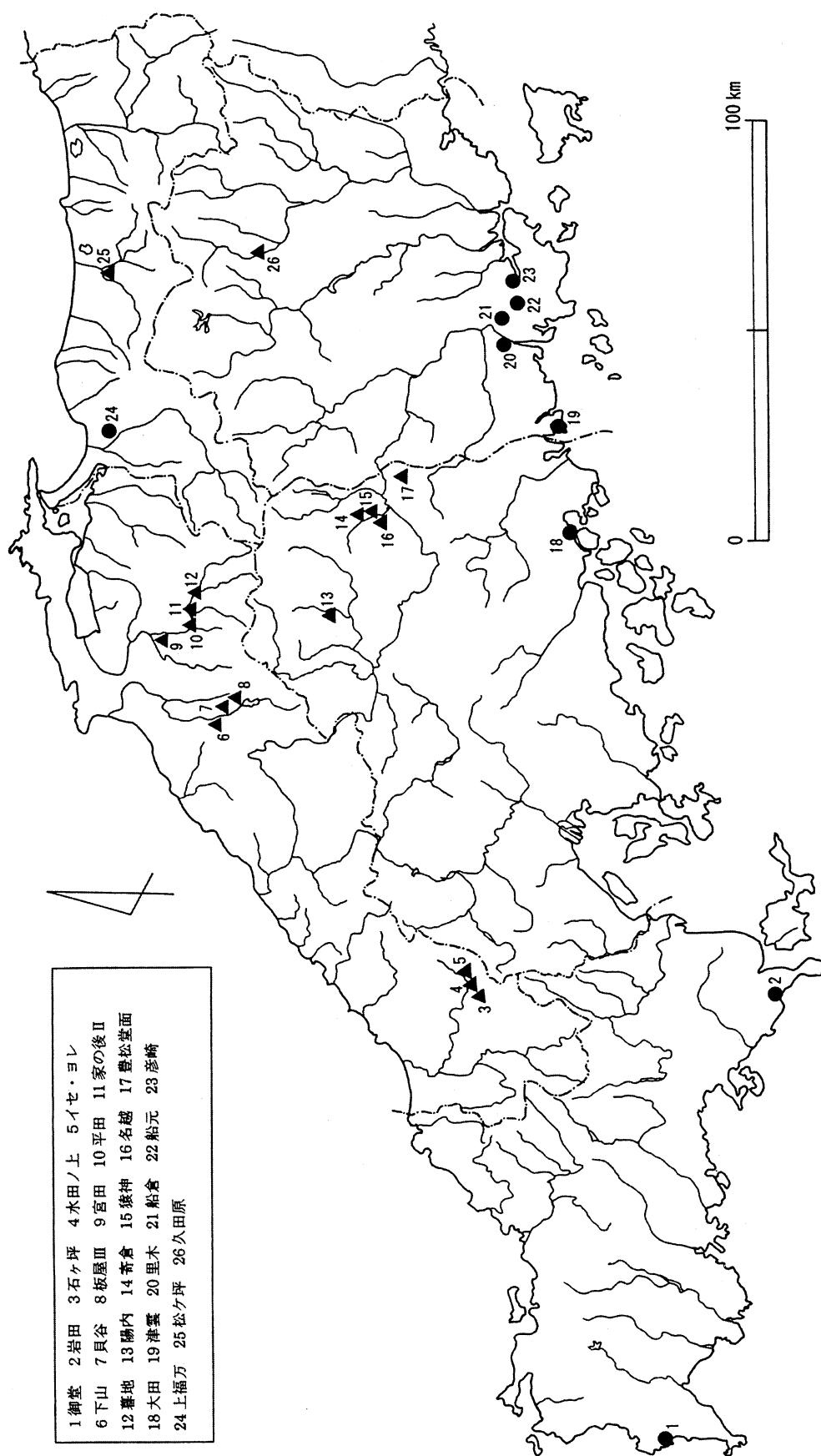
〈引用文献〉

- 池葉須藤樹 1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』、私家本
梅沢太久夫 1971「縄文時代の葬制について（1）－その性格と意義についての試論－」『台地研究』第19号
江見正己編 2004『久田原遺跡・久田原古墳群』、岡山県教育委員会
岡崎雄二郎編 2000『九日田遺跡発掘調査報告書』、松江市教育委員会
小野 昭・春成秀爾・小田静夫編 1992『図解・日本の人類遺跡』、東京大学出版会
鍵谷守秀編 1999『船倉貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第8集、倉敷市埋蔵文化財センター
角田徳幸編 1998『板屋Ⅲ遺跡』、島根県教育委員会
角田徳幸 2000「西中国山地帯の遺跡の様相－三瓶火山灰と縄文時代遺跡の関係を中心として－」
『縄文時代における山間地域の諸問題』、第11回中・四国縄文研究会資料
川越哲志 1976a「帝釈名越岩陰遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群』、亜紀書房
川越哲志 1976b「豊松堂面洞窟遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群』、亜紀書房
川越哲志 1978「帝釈猿神岩陰遺跡の調査」『広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室年報Ⅰ』、
広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室
河瀬正利 1988「帝釈峠遺跡群の埋葬」『日本民族・文化の生成1』永井昌文教授退官記念論文集、
六興出版
鎌木義昌 1955「岡山県中津貝塚発掘の縄文文化後期の屈葬人骨」『石器時代』第1号
神柱靖彦編 2002『貝谷遺跡』、島根県教育委員会
北浦弘人編 1986『上福万遺跡Ⅱ』、鳥取県教育文化財団
清野謙次 1918「備中國浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告
第五冊』、京都帝国大学
清野謙次 1946『日本民族生成論』、日本評論社
清野謙次 1969『日本貝塚の研究』、岩波書店
倉敷考古館編 1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7号、倉敷考古館
近藤義郎編 1995『南方前池遺跡』、山陽町教育委員会
酒詰仲男 1951「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報』1、日本考古学協会

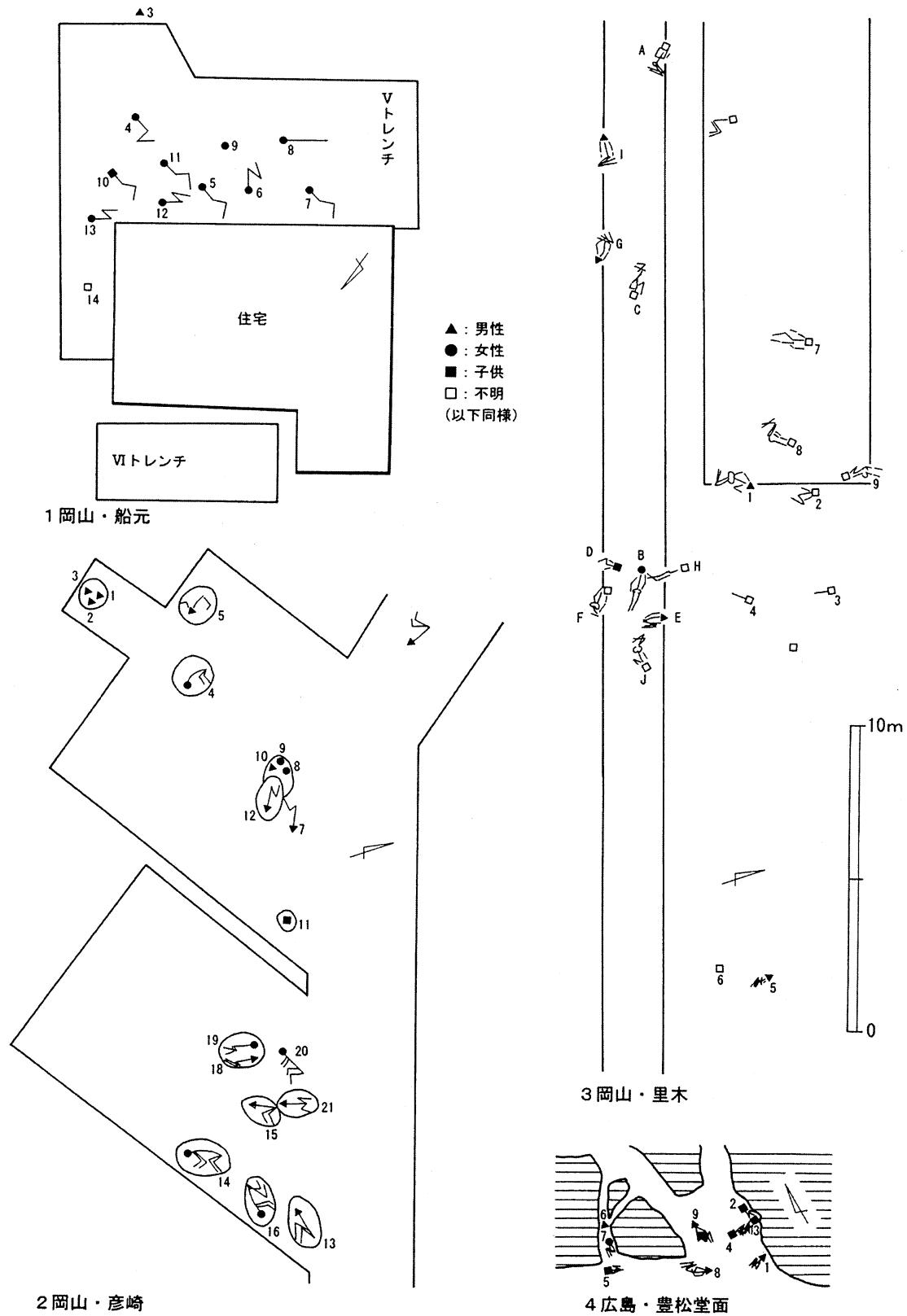
- 佐々木謙・小林行雄 1937 「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」『考古学』第8卷10号
- 潮見 浩・藤田 等 1955 「山口県熊毛郡平生町岩田遺跡の調査」『私たちの考古学』第6号
- 潮見 浩編 1971 『広島県文化財調査報告第9集』、広島県教育委員会
- 潮見 浩・藤田 等・川越哲志 1976 「帝釈觀音堂洞窟遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群』、亜紀書房
- 瀬川拓郎 1980 「環状土籬の成立と解体」『考古学研究』第27卷第3号
- 田嶋正憲編 2006 『彦崎貝塚』岡山市教育委員会
- 田中良之 1993 「古代社会の親族関係」『原日本人－弥生人と縄文人のナゾー』、朝日新聞社
- 戸沢充則・堀部昭夫 1976 「帝釈寄倉岩陰遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群』、亜紀書房
- 中越利夫 2000 「岩田遺跡」『山口県史－資料編考古1－』、山口県
- 中村 大 1998 「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究（1）－東北北部の土壙墓について－」
『國學院大學考古學資料館紀要』第14輯
- 長岡充展編 1985 『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』鳥取県教育文化財団
- 春成秀爾 2002 『縄文社会論究』、塙書房
- 深田 浩編 2002 『下山遺跡（2）』、島根県教育委員会
- 間壁葭子 1987 「考古学から見た女性の仕事と文化」『女性の力』日本の古代第12巻、中央公論社
- 松村博文 2000 「瀬戸内、東海および関東地方出土の縄文人の歯牙計測値における時期間、遺跡間
および個体間変異」『国立科学博物館専報』第32集
- 水島稔夫編 1991 『御堂遺跡』、下関市教育委員会
- 南川雅男 1995 「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生態の復元」『新しい研究法は考古学に何を
もたらしたか』（改訂版）、クバプロ
- 森下哲哉 1996 「第二章 縄文時代」『新編倉吉市史』第1巻、倉吉市
- 森田 茂・服部恒明・河野 徹 1973 「日本人胎児の長骨長による頭殿長の推定」『東京慈恵医科大学雑誌』第88号
- 山田康弘 1996 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第4号
- 山田康弘 1998 「交流と墓制（後晩期を中心に）」『本州西部地域における文化交流の諸問題』
第9回中四国縄文研究会資料
- 山田康弘 1999a 「縄文人骨の埋葬属性と土壙長」『筑波大学先史学・考古学研究』第10号
- 山田康弘 1999b 「縄文から弥生へ－動植物の管理と食糧生産－」『食糧生産社会の考古学』
現代の考古学第3巻、朝倉書店
- 山田康弘 2000 「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17集
- 山田康弘 2001a 「山陰地方における縄文時代遺跡研究の展望」『島根考古学会誌』第18集
- 山田康弘 2001b 「縄文人の埋葬姿勢（上）（下）」『古代文化』第53巻第11・12号
- 山田康弘 2001c 「中国地方の土器埋設遺構」『島根考古学会誌』第18集
- 山田康弘 2001d 「縄文人骨の形質と埋葬属性の関係－頭蓋形態小変異と埋葬位置、抜歯型式に
について－」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』
- 山田康弘 2001e 「東北アジアの石製装身具集成－中国」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の
先史文化 第4編』
- 山田康弘 2001f 「縄文時代の人骨頭部の取り扱いについて」『祭祀考古』第20号

- 山田康弘 2002a 「中國地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』第19集
- 山田康弘 2002b 『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成12・13年度科学研究費補助金（奨励研究A）研究成果報告書
- 山田康弘 2003 「頭位方向は社会組織を表すのか」『立命館大学考古学論集』
- 山田康弘 2004a 「縄文時代の装身原理－出土人骨にみられる骨病変等と装身具の対応関係を中心にして」『古代』第115号
- 山田康弘 2004b 「島根県における縄文時代石器の様相－石器組成を中心に－」『島根考古学会誌』第20・21集
- 山田康弘 2004c 「墓制からみた山地域と沿岸域」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』、日本考古学協会
- 山本 清 1967 「美保関町サルガ鼻・権現山洞窟遺跡について」『島根県文化財調査報告書』第三集、島根県教育委員会
- 渡辺友千代編 1990 『石ヶ坪遺跡』、匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 1991 『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』、匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 1993 『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』、匹見町教育委員会
- 渡辺 誠 1973 「埋葬の変遷」江坂輝彌編『縄文土器と貝塚』古代史発掘第2巻、講談社

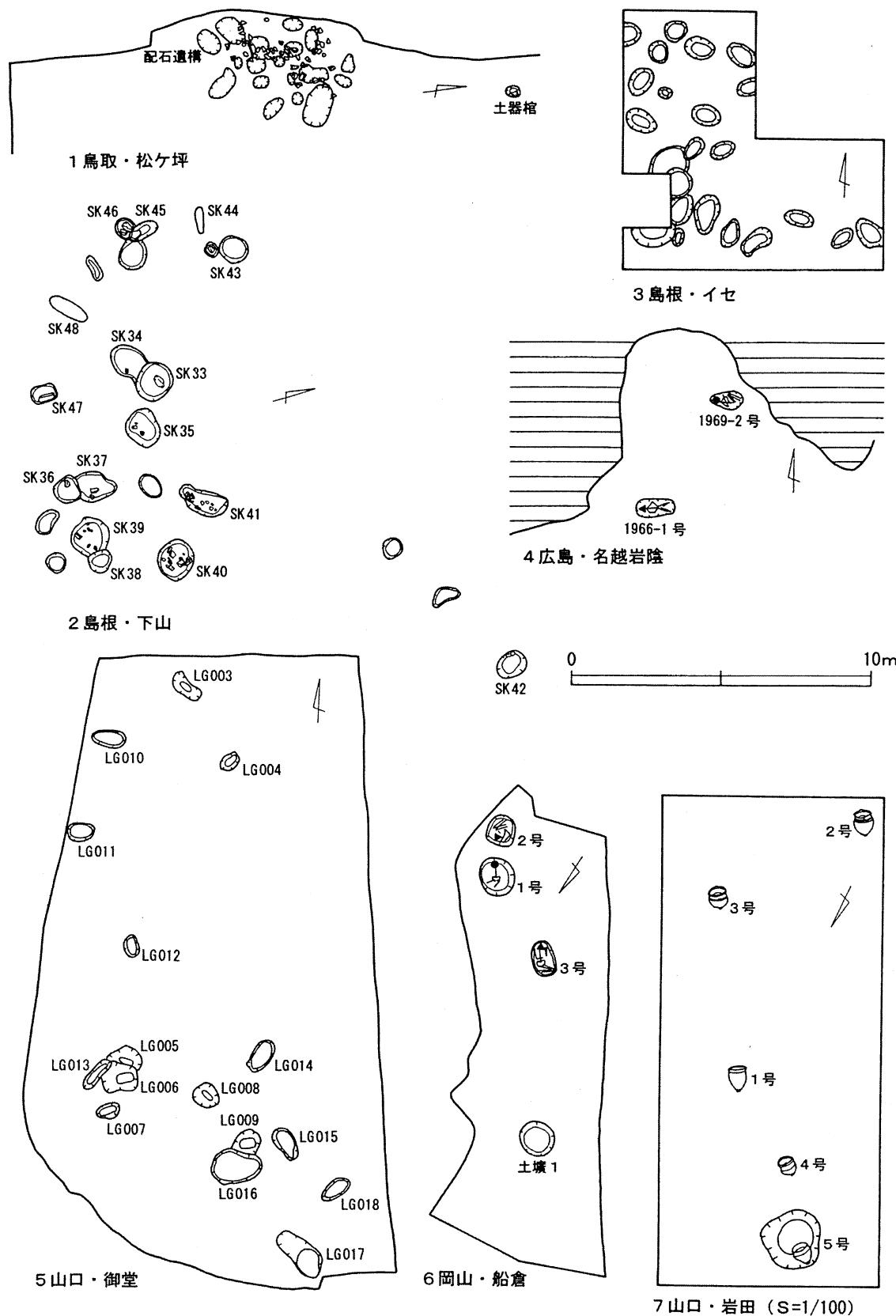
(各図の出典は上記文献より。一部改変。)



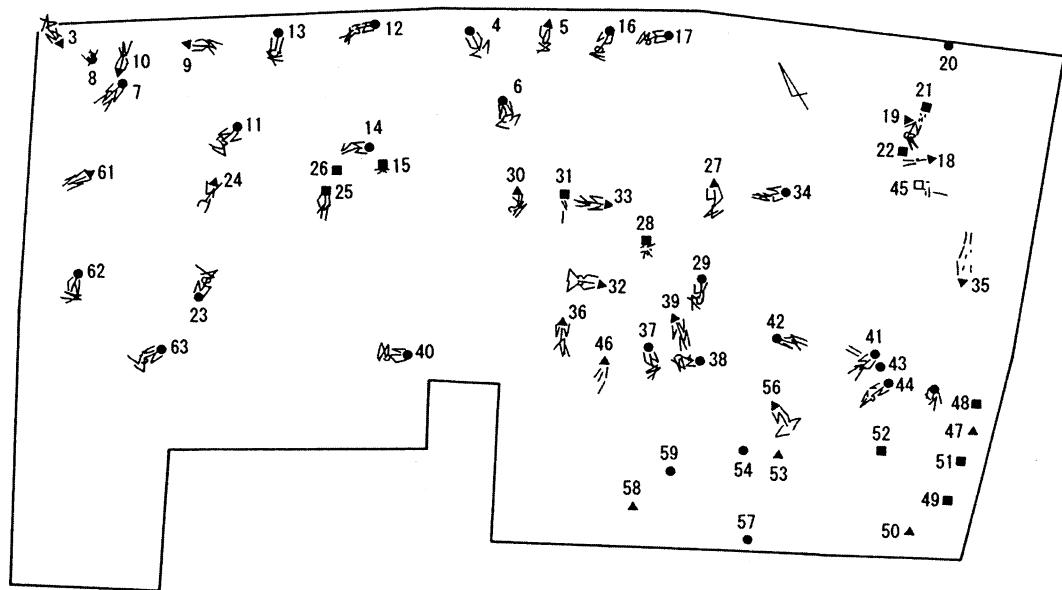
第1図 中國地方における主な縄文墓地遺跡
(●：沿岸域の遺跡、▲：山地域の遺跡)



第2図 中國地方の縄文墓地（1）

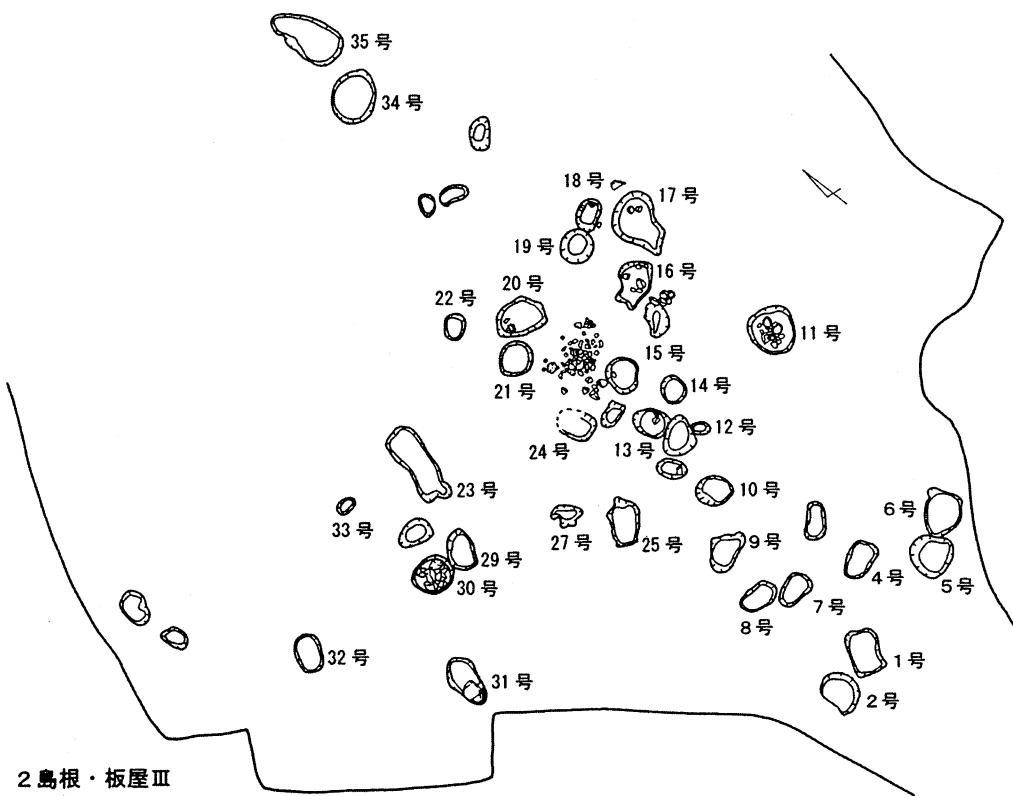


第3図 中國地方の縄文墓地（2）



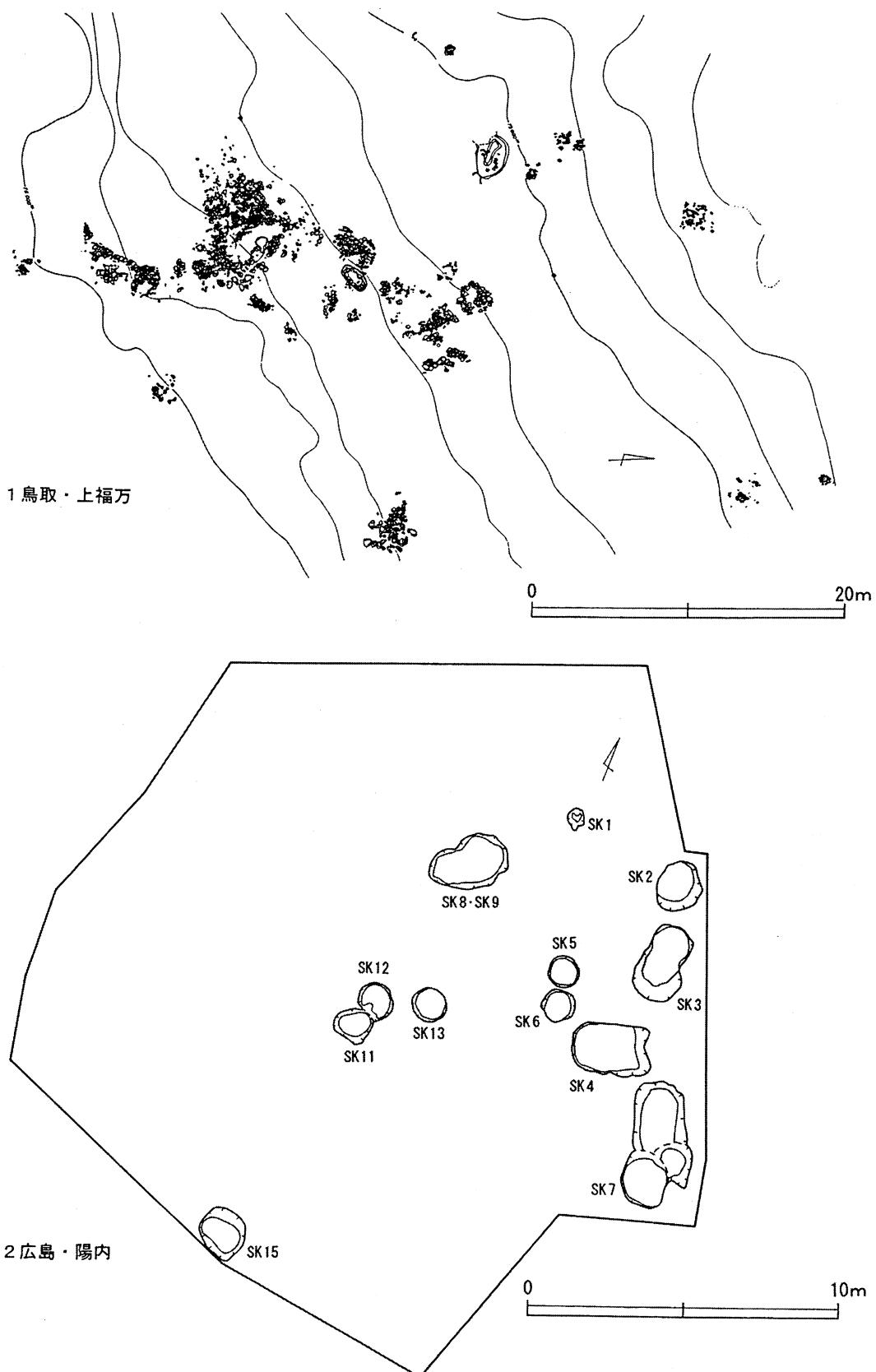
1 岡山・津雲

0 10m

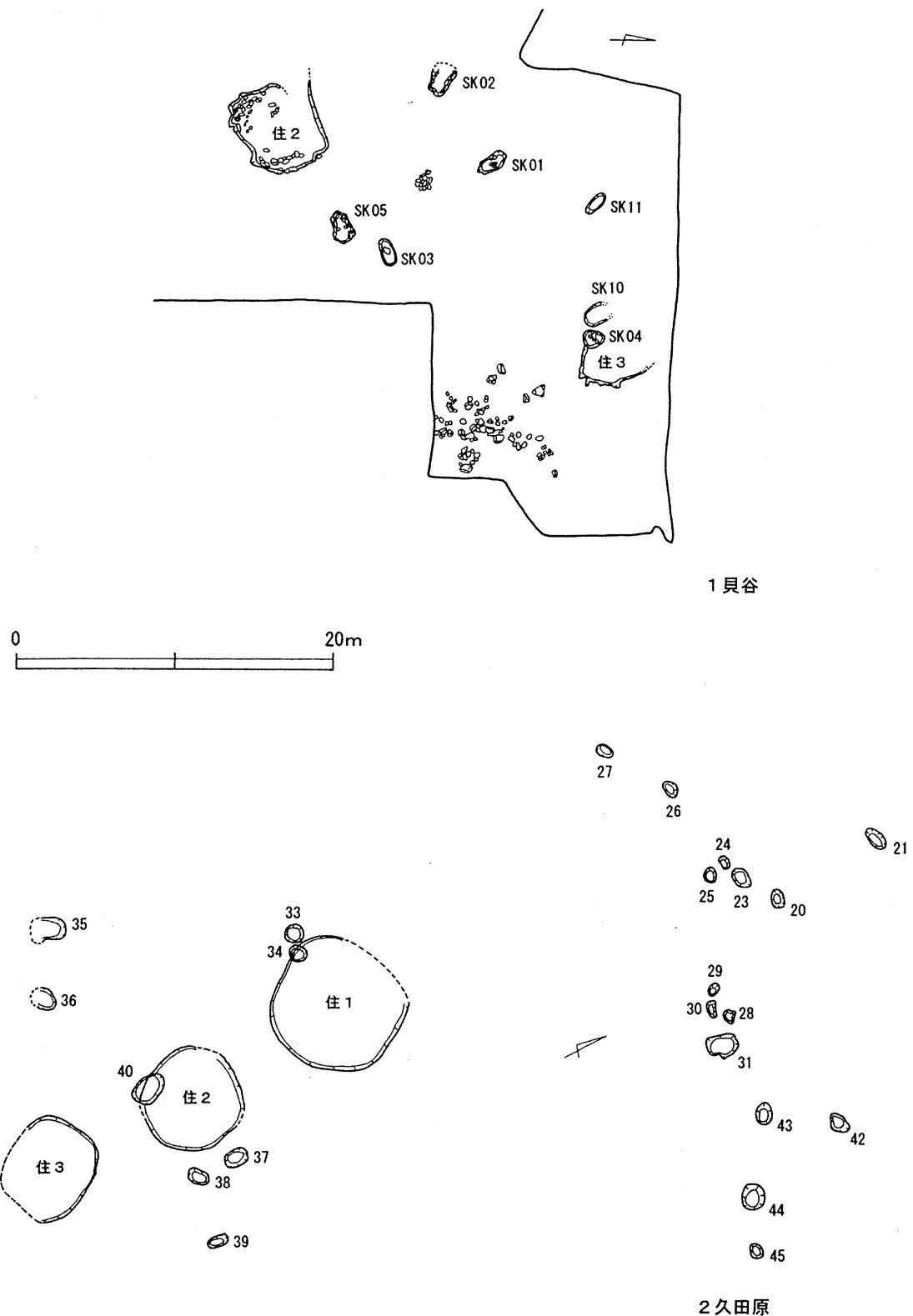


2 島根・板屋III

第4図 中國地方の縄文墓地（3）



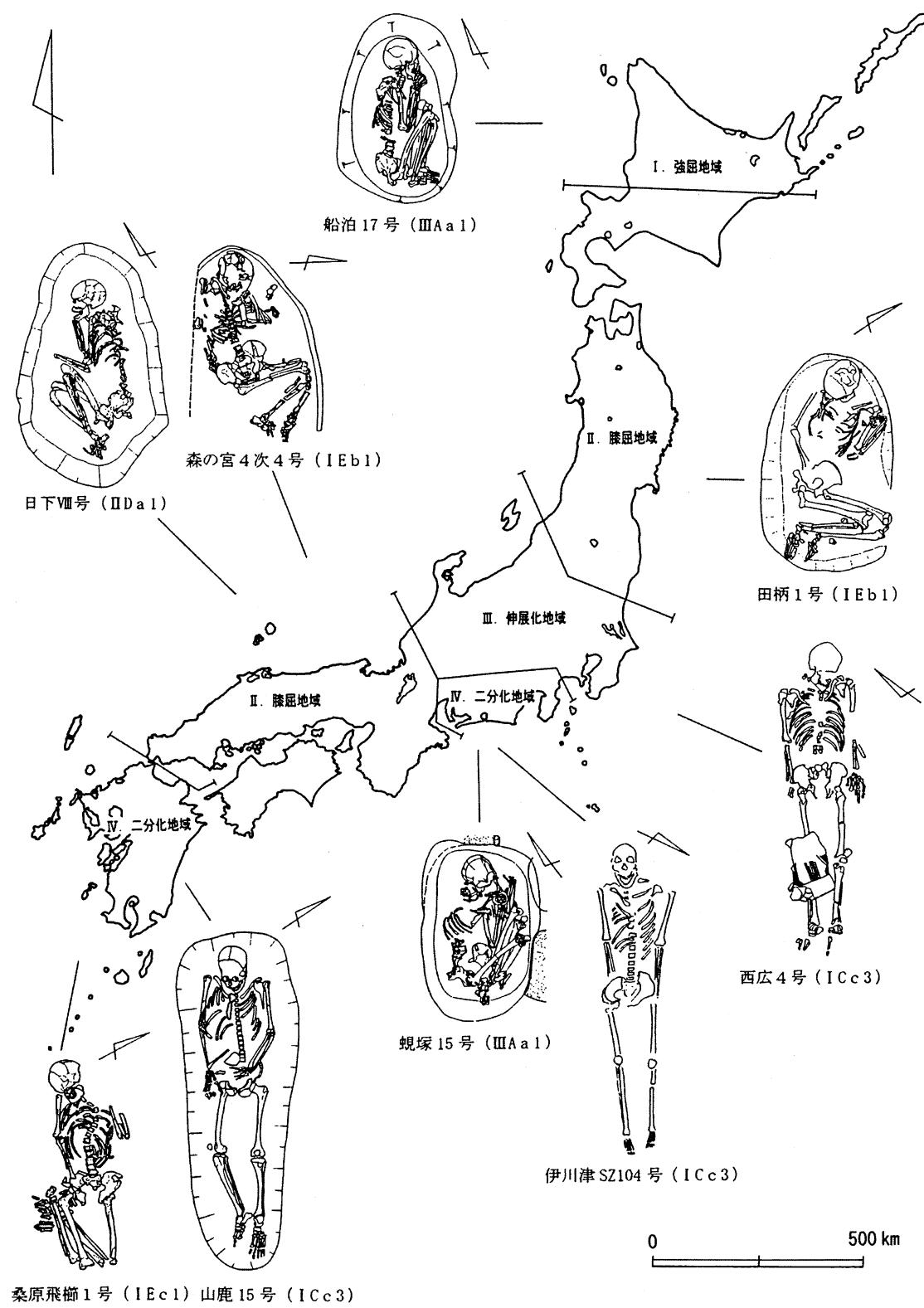
第5図 中國地方の縄文墓地（4）



第6図 中國地方の縄文墓地（5）



第7図 各遺跡検出の埋葬例



第8図 埋葬姿勢の地域性